
勇者さんとその他もろもろ復帰物語

夢幻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者さんとその他もろもろ復帰物語

【Nコード】

N3095U

【作者名】

夢幻

【あらすじ】

魔王との戦いにスポンサーがついて公式に行われるようになった世界の物語。墮落しきって警備兵で働く勇者と、これからの旅に心躍らせる罪浅き戦士。そして、旅の合間に出会った仲間たち。社会の荒波に負けないように戦う勇者と戦士とその仲間たちの魔王や現実、欲望との戦いを描いた物語である……はず。

第一話 この世の中だと戦士も職を探す（前書き）

作者は読みやすいように配慮した書き方をしておりません。
具体的には一行ずつ空けるとか、ある程度したら空行を入れるなど
ですね。

していません。よくある小説と同じ形で書いております。
読み辛いかと思いますが一層しく願います。

辛いモノでも甘いモノでも変化球でもどしどしくださいね。

感想の話ですよ。

第一話 この世の中だと戦士も職を探す

「ぬあー、やっぱり駄目かあ」

施設の外は陽気なお日様が照らす光でまぶしいくらいだ。少し目を開くことが億劫になる。しかし、目を開けなければ道に出ることもできない。例え、仕事が見つからなくても道を歩かなければ人として失格だろう。

目をぱっちり開く。この町の家々の様子が映る。現在の社会の技術では伝統の技術と言われる木造の建築である。基本構造の柱に木を使うわけではなく、外張りも木材、屋根も木材を使用した建築物である。それがこの町の普通の家の構造。そして、その家々の間を突っ切る道はあまり整備されていない。両端には草花が生え、歩ける道そのものは砂利が多い。

そんな道の場所を確認した後、左右からの通行するものがないかを確認する。うっかりここで命を落とすなんてことはしたくない。例え、仕事が見つからないからという理由付けが誰かにされても死にたくない。案の定、右側からバイクが一台走ってきた。

最新の技術を使用し地上から浮いて走る、俗に言うエアバイクだ。しかし、郵便職業専用車として赤と白のカラーリングがされている。少しダサイ。そのエアバイクが、立ち止まっている俺の前で停止した。配達員は何やら慌てているような困っているような顔をしていた。そして、考えた挙句口を開いた。

「すいません、この町の広場ってどこにありますか？」

「あ、広場ですか？ 広場ならその曲がり角を右に曲がって突き当りですよ」

答えた俺の体を上から下まで配達員は目を行き渡らせた。どうやら、俺がどういう人なのかを見ているようだ。頭には鉄製の兜を被り、皮の生地で作られた俗に言う旅人の服を着て、背中に斧を持っているこの姿。どこからどう見ても戦士に見えたのだろう。そこは

良しとしよう。ただ、出てきた施設が職業紹介施設の酒場であるから、配達員は次の瞬間こう言ってきた。

「ありがとうね、戦士の新人君」

戦士歴1年目が終わるのに、新人。あんまり気にしないで、苦笑いしながら答える俺。

「いえ、当たり前のことです」

「ははは、そうだね。戦士の新人君も見に来るといいよ、とっておきのお知らせだから」

再びエンジンをかけ、走り出すエアバイク。走り出すのと同時にそれとも会釈の方が早かったかは分からないが、配達員は教えた通りの道を走って行った。

そして、俺が気になっていたのはとっておきのお知らせという言葉だ。戦士の俺が気になるお知らせ？ まさかとは思うがついに……。

広場へ向かってみると既に人だかりができていた。家は木造建築の多いこの町だが、広場はしっかりと整備されている。レンガ造りの道に中央には鳥が集まる噴水。休憩を取る場所を考慮されてのベンチもあちこちに設置されている。それでも、普段は賑わうことのない広場だが、配達員が持ってきたとっておきのお知らせのおかげでか、集客率はいつもの5倍だ。そして、その群衆を形作るのは大柄な男たちばかり。中には戦士の恰好をする者もいる。俺から見ると同業者だ。

普段から広場に行き慣れている俺は、広場の設置物の大体の場所を覚えている。人だかりができている場所は、普段は誰も見ない掲示板が置いてあるところだ。それにしても何が貼りだされたというのだろう。気になって仕方がないため、自分の目で確認することにした。足を人だかりの方へと進める。一番外側の人に体が接触。摩擦がどうかそいう問題じゃないことに気づく。動かないのだ。

「う……ふむ……うごっ」

変な言葉を吐きながら外へと飛ばされてしまった。だが、あきら

めない。それは戦士としての意志にもあるからだ。もう一度俺は挑戦する。

「ふむ……むむむ……ぷふっ」

やはり無理だった。だが諦めてはなるまいと何度も挑戦する。

「まだまだだあっ！」

叫んでも無理だった。

肩を落とし溜息を漏らして人だかりを見つめる俺を、先程の配達員が見つけた。そして教えてくれた。俺の言動を最初から見ているらしく、成功する方に賭けていたようだが成功しなかったため近寄ってきたらしい。誰と賭けていたのかを聞いてみたかったが、つまり、ひどい。

「見たかったんですね、掲示板に貼った貼り紙。はい、これです」
「魔王第130代目と決闘のお知らせ？ 挑戦者募集……これはっ！」

「書いてある通りなので戦士さんにはとっておきかと思ひまして。それでは」

そう言った配達員はその場を後にして、乗ってきたエアバイクにまたがり広場から姿を消した。

ほとんど配達員の最後の言葉が耳に入らなかった。抑えきれない躍動が俺の体を支配している。こらえるのに必死で体がびくびくと揺れるのが分かる。もう限界だ。うん、限界。

「やっと夢が叶えられるぜえーっ！！」

広場のちよつと中心からずれたところで思いつきり叫ぶ。15歳。職業は戦士。

「あんだ、このガキ？」

「おめえ、この超戦士イガン様の前で何をなめたことを言っただあ？」

「吹っ飛ばしてくれるぞお、ごらあ」

「え……ええ？」

しまった。大変な状況を作り出してしまった。

叫んだ後、家に帰ろうとした際におそらく群衆の中にいたのだろう男たちが3人、俺を囲んだ。全員俺よりも身長が高く、筋骨隆々と戦士のイメージ絵となれそうな男たちだ。おまけに全員が怒っている。理由はよく分からないがこちらの言動が気に食わなかったらしい。一方的な理由の突き付けだとかそんな正論をここで展開した瞬間に、暴力での解決が目に見えている。だから、言わない。

「えーと、その、すいませんでした」

「謝ってすむもんじゃねえぞ、このガキが」

「とりあえずその兜をよこせ」

「兄貴、それは泥棒ですぜ」

「いいんだよ、命の代わりにもらってやるってんだ」

「兄貴、親切ですぜ」

「か、兜は無理だよっ」

この兜は絶対に譲れない。譲らないではない、譲れないのだ。何にせよ、この男たちは引き下がってくれない。それどころかどんどん達が悪くなる一方だ。どうすればいい。考えるんだ、俺。

「関係ねえっ！」

いきなり、男たちのうちの一人が俺の兜を鷲掴みにしてきた。絶対に守らなければならぬものだ。これを奪われるわけにはっ……！

「離せってば！」

考えても答えが出なかった。ならば、もう関係ない。俺の兜を奪おうとしたんだ。泥棒なんだ。悪いやつなんだ。懲らしめてやるんだ。

「何だと、生意気なガキめ」

暴れる俺を止めようと、右方向から男達の内の一人在両手を俺に向けてくる。向かってくる両手に対して、兜を軸に体をくると回転させ足で回転蹴りを食らわした。見事に男の左手に命中し、男はあまりの痛さにうずくまった。ここまで激しい行動でも頭から手は離れないか。仕方がないので、さらに体を回転させて、兜を鷲掴み

にしているやつの股間を蹴り飛ばした。

「ふぐっ……」

強烈な痛みが彼を襲ったのだろう。そのまま両手で股間を抑えてしゃがんでしまった。そんな男に寄り添おうとした左の相手の右わき腹に、頭突きを食らわした。兜越しに。男は苦しみながら膝をついた。

「あがあっ」

突き刺さる痛みにも耐えながらも頭突きを食らわした男が、体の正面をこちらに向けて立ち上がろうとしていた。隙をあらわにしている状態でしかないと認識した。男の顎から蹴りを食らわして、がら空きになった胸の部分に脇腹にくれてやったのと同じものを与えた。男が背中から倒れこむ。

「よくもやってくれたなあ、このがきがぁ！」

最初に回転蹴りを食らわした右側の男が、いつの間にか立ち上がって俺を抑えようとしていた。そして、左側の俺を吹き飛ばした瞬間の俺を止めることを最初から企てていたのか、いきなり襲いかかってきた。しかも、倒れた男に対して正面を向いていたため俺の背後から襲いかかってきている。仕方がないので倒した男の上を踏み行き、くると右回転して男を正面に構える。ちょうど、倒れた男を挟む情景だ。なぜ、正面を向くのかと言われれば背中を相手に見せていては戦えないからだ。

いざ、もう一度！

「はい、そこまでだ」

「え」

「なんだとっ！」

突進のスタートダッシュを切りそうになった俺と、おそらくカウンターを食らわそうとした右側の男が同時に声を上げ、同じ方向を向いた。そこには、鎧姿の男が立っていた。

「イガンの連中も突っかかり過ぎだ。たかだか子供の夢につっかか

つてちゃ部下に逃げられちまうぜ」

「ああ!？」

股間を抑えながらイガンと呼ばれた男が声を張り上げる。みつともない姿なのはどうすることもできない。鎧姿の男の言葉は続く。

「今回はやられてるから見逃してやるけど、今度突っかったら連行モンだからな」

「分かってるよ。おら行くぞ、お前ら」

「兄貴、おぶっていきやす」

「……すまん」

俺が倒した男を引きずりながらカウンター待ちをしていた男は、股間を抑える男を背中に乗せてその場から姿を消した。ギャラリーも鎧姿が来てから徐々にその場を去って行った。俺も帰るとするか。

「待ちな、小僧」

「何だよ」

鎧姿の男が突っかかってきた。頭から足まで鎧で覆われた身体で近づいてきた。その姿からおそらく警備兵なのは分かるが、俺に何の用があるんだろう。

「見たところ、戦士だろ」

「職業歴1年目が終わろうとしてるけど」

「ふーん。それで、本題に入るけど親さんは？」

「隣の王国で暮らしてるけど」

本題……？

「ペンシル王国の隣？ 面倒だな」

面倒？ なんでこいつが面倒くさがる必要があるんだ。というよりこれではまるで職務質問だ。厄介なものに絡まれたな。早く終わらないかな。

「仕方が無いな。その親さんの家まで連れて行け。お前をプラストに置いておくのはルールに則れないからな」

「は？」

今、この警備兵は「プラスト」って言ったか。もう一度確認して

みよう。俺は心配性なんだ。

「プラスト……？」

「ああ、プラストだよ。知ってるだろう？ 警備都市でありながら罪人を管理しておく刑務所が設置されている都市だ」

間違いない。プラストって言ってる。プラストは一般常識論から警備都市と呼ばれており、現実的にこの国の刑務所が置いてある都市だ。なぜ、俺がそこに置かれるんだろう。聞いてみよう。

「何ですか？」

「いや、分かるだろう、普通。大人3人に暴行加えって何の罪も無しはないだろ。暴行罪だよ、暴行罪」

「あ、そうか……ってええ！？」

信じられなかった。全身が固まったような感じになる。

「驚くこともねえだろ、子供じゃあ無いんだし。いっぱいしの戦士だったら戦闘と喧嘩の区別もつくだろう？」

「いや、なりたてですから」

「まあ、そういうことも知りながら戦士は成長していくんだ。よし、というわけで今から出発するからな。とりあえず、警備都市にまで書類を取りに行くから。お前の親の住んでるのは西の国か？」

いきなり話し始めた鎧姿の男の会話についていくのが必死で、さらに現状を認められないため安易な返事を返すことになった俺。

「西……」

「なら、道中で警備都市に寄れるな。おら、行くぞ。特別に手錠は無しだ」

「ちょ、ええ！？」

「なんだよ、現実ぐらい認めろよ。俺だって今期のノルマ達成でやつと給料もらえるのが夢なんじゃないかって思ってるんだぜ。でも認めるしかないだろ。だから、さっさと認めろよ」

「訳わかんないよっ！」

戦士歴1年目終わり頃、俺の罪人歴1年目が始まろうとしていた。

第二話 警備兵に支給される携帯電話はスマートフォンではないようです。

(前)

前言撤回です。すみません。いただいた指摘の中の正当防衛を主張するシーンが次の話へ吹っ飛んでしまいました。

この場をお借りして謝ります。

申し訳ございませんでした。

では、警備兵さん主体の第二話始まるよお。今回はあまり読み直しをしていないため荒い部分が見当たりますが、その時もまた直球でも変化球でもお願いします。

第二話 警備兵に支給される携帯電話はスマートフォンではないようです。

「あ、もしもし。こちら『終焉の町ノート』勤務のリノです。お疲れ様です」

「おやりノ君かい？ どうしたんだい？」

「その声は本部長……！？ 何で本部長が電話番号を？」

「少々厄介事が起きてしまっただけ、皆出払ってしまっているんだよ。それで、どうしたんだい？」

兜の上半分を上部へとずらし、声が兜の中でこもらないようにしながら携帯電話を片手に、日差しすらもシャットアウトされた森を歩き続ける俺。長ったらしく描写しているが簡単に言えば俺は森を歩きながら電話で喋っているということだ。いや、少し訂正が必要だな。俺達は森を歩きながら、だ。背後には特別に手錠をかけないで自由に歩かせている新人戦士が一人いる。そういえば、まだ名前も聞いていない。聞く必要があるのかどうかも迷う。というよりも俺の本心が面倒くさいから止めると叫んでいるのが分かる。だから聞かない。

いつもと同じように不得意である敬語を不正確に使って本部と連絡を取る。ところどころ音声聞き取り辛い。やはり、携帯電話の電波は森の中まで届いていないのか。勤務している町でも、地方のせいなのか相手と連絡が取れる場所は限られている。外から電話をかける上で最悪の場合は公衆電話となる。

「珍しいこともあるもので、今期のノルマ達成です。身柄確保しますので、今そちらに向かいますから。あ、後保護者が西の国にいるそうなので、そちらに向かった後そのまま西の国行きますので。

大丈夫ですよ。俺のところ、変な予定入れられてませんよね」

「ちょっと待ってくれよ。君の担当の人に聞いてみるよ。本部長とはいえすべての人間の予定を管理しているわけではないからね。という訳でまた後でかけ直すよ」

「すみません、わざわざ」

「いやいや、暇だったから大丈夫だよ」

そういうと、本部長は電話を切った。ツーツーという音が俺の右耳に聞こえた。

警備兵の時間割は本部の「お上」が決めている。どうやら最近の就職氷河期と言うか好き嫌いの多い若者による就職差別化と言うのか、警備兵は人手が足りていないらしい。そこで、空いた時間が有ったら警備しろと言わんばかりに、予定を詰め詰めにしてくるのが本部の「お上」だ。勘弁してほしい。それで給料が変わらないというのはどういうことなのか。手当ぐらいは欲しいのが本望。

おっと「お上」と言っても本部長レベルはまだまだ関係ない。本部長の上にいるいろいろ構えているのが警備兵なのだ。確か、五師団長が居て、その上に三將軍。さらに、その上に大警備兵長兼代將軍という面倒な役職が構えていたはずだ。まあそんなことはどうでもいいな。

というわけだから、予定の確認は絶対に必要なのだ。また、勤務先に戻るとか面倒なことはやめてくれよ。これから別の場所ぐらい行きてえんだよ。これも前の職業の名残か……。

「ふん、はあっ！」

気がつくと、後ろにいたはずの新人戦士はそこら辺に生えている木に向かって斧を振り回していた。どうやら木を敵に見立てての立ち回りの訓練をしているようだ。

「おい、好きにしている良いとは言ったが、誰が訓練しろって言った」

「だって時間がもったいないです。歩いているだけでは『熟練度』は溜まりませんよ」

「新人のくせによく知ってるな。ただ、お前の『熟練度』はまだ1ぐらいなんじゃねえか？」

「口の悪い警備兵ですねえ。そちらこそ3・14なのではないですか？」

「何気に円周率小数第二位までかよ、微妙すぎるだろ。5ぐらいはあるからなっ！」

「嘘ですね」

「この小僧っ……」

斧を振り回す速度よりも口から言葉を飛び出す方が速いな、この戦士。生意気にもほどがあるだろう。ちゃんと学校行ったのか。どう考えても初対面に対する礼儀作法の点が落第点トップクラスじゃないか。世も末だな。こういう奴が捕まってくれてありがたいぜ、まったく。

それはいいとして、電波の受信にとって最悪な位置にいるのか、中々折り返し電話がかかってこない。そのため、俺とこのあほ戦士は次の街への道を進むことにした。次の街と俺が勤務していた町との間には、大した危険が存在しない。険しい山道もなく谷もない。あるのは少々長い平凡な道だけだが、それでもその途中に小さな森がある。それが今歩いている「テクスの森」と呼ばれる森だ。

この森では危険と称されるモンスターの生息は一切確認されていない。というより存在しないと言われた。そのため、街と町を繋ぐ道も整備しやすかった。というわけで出来上がったのが、森の景観を眺めながら森の中を歩くことができる歩きやすい道である。俺からの感想は、便利である。ただ、後ろで斧を振り回したい衝動に駆られているあほ戦士が持つ感想は、最悪というものである。

「この森の道って整備されてるから変ですよね」

「はあ？ 何言ってるんだお前？」

「だって道なき道を進むのが一番成長しませんか？」

「馬鹿野郎、自分から危険に突っ込んでいくのは成長とは言わんだろうが」

この通りである。

しばらく歩いていると、突然携帯電話のバイブが鳴った。どうやら電波の受信に最適な場所まで来たようだ。それでも、まだ森の中

だが。

「はい、もしもし」

「リノ君かい？ 君のこれからの予定は入っていないかったよ」

「よかった、ありがとうございます。それで……」

「待ったリノ君！ 話はこれで終わりじゃないんだ」

俺の右手の指の動きがボタンを押す寸前で止まる。本部長の話を寸断するって暴挙になるところだった。落ち着こうとしながら本部長の話を右耳から聞く。

「え？ なんですか？ まさか給料上がりますか!？」

「落ち着くんだ、リノ君。実は君たちがこれから立ち寄る『貿易都市イレイサー』で暴動が起きているらしいんだ。それで、君の担当者には君にそれを止めてもらいたいそうだよ」

「無理です」

返答までに呼吸をしなかった。

「即答だね、理由はあるのかい？」

お決まりのパターンだな。本部長は大抵こうやって切り返してくる。今回は突然の出来事だが、こう言った大きな仕事を任せられることになる際の逃げ道として用意している言葉がある。それを利用しよう。

「まだ新人の俺に頼むものではないですよ」

「ははは、やっぱり君もそう来るかい。大概の人はそう答えるんだよ。うーん、なら質問を変えよう。君がやらないとして他の人、例えば私などはどうすればいいと思う？」

この切り替えしも本部長お得意のものだ。少々考えなければ答えは得られないな。

「数秒時間を下さい」

「ははは、いいよ。でも数秒とは言わないで数十秒でも十分なのに」
本部長の声に返事も相槌も打たなかった。俺の後ろでは新人戦士がまたも斧とそこら辺の木々を利用して武術訓練をしているが、今は俺自身の頭の思考整理で一杯一杯だ。そして、一つの結論にたど

りつく。仕方ない、こうするしかないだろう。

頭に浮かぶ上がった結論をゆっくりと言葉に翻訳して口から飛ばしていく。

「本部長」

「何だい、リノ君？」

「暴動を鎮圧するための部隊を用意することが最優先でしょう。手の空いた者を部隊として召集するんです。それで、できるだけ早く行動した方がいいのではないでしょうか。長引けば事態は悪化するだけですから」

「ふむ。リノ君のその頭のキレはやはり以前の職業が鍵になっているのかな？」

とんでもないことを言われた。慌てて弁解する。

「そ、そんなことないですって」

「そうかい？　しかしねえ、見落としている点が一点だけあるんだよ、リノ君」

「え、なんですか？」

「現段階では全員出払っていて状況を把握することができないんだ。こういった状態が今の現場で起きているのかを把握しない限り、対策も予想も立てられない。そうだろう？　つまり、情報を収集することが最優先なんだ。そこで、リノ君。君に任命するのはこの役割だ」

「え？」

「つまり、暴動を止める必要はない代わりに情報を手に入れてくる必要が君に生じたということだ」

「は、はあ」

あれ？　なんだか結局暴動に関わることになっていないか？　あれだけ思考を巡らせて出した結論がしつぺ返し喰らって元も子もないじゃねえか。

「必要なのは暴動に参加しているおおよその規模。そして、できたら首謀者としての容疑者一覧が欲しいね。では、楽しみに待ってる

よ。君が言ったことを君が信じるのならば早い方がいいよね。じゃあさよなら」

ツーツーという音に合わせて、背後からは訓練している戦士の気合の入った声が聞こえてきた。しばらく俺の足はその場から動こうとしなかった。

第三話 胸に秘める思いこそ溢れだしたときが一番カッコいい（前書き）

どうも。夢幻です。

キャラクターのプロフィールが必要なのかどうかわかりません。

主要キャラクターとしては、まだ二人しか出てません。さらに、名前が分かっているのもまだ二人しか分かっていないという凄まじさです。

それは置いときまして、今回も感想お待ちしております。誤字脱字の方も受け付けております。

第三話 胸に秘める思いこそ溢れだしたときが一番カッコいい

「警備兵さん、早く行かないんですか？」

「あ、そうだな。うん、そろそろ行こうと思ってたんだよ」

「大丈夫ですか？ 疲れたんですか？」

「へいきへいき」

テクスの森に入ってちょうど半分を抜けたところぐらいだと思われる。歩いてきた感覚から大体の距離が分かるため、なんとなくだがそういうことが分かる。それよりも、さきほど唐突に任命された任務のことで頭が一杯になる。

「危ないですよっ！！」

「え？ ああ、すまない。少し考え事をしていた」

大分頭が一杯になっており注意が行き届いていないらしい。背後からのあほ戦士の声が無ければ目の前に突然現れた木に直撃する瞬間だった。進路を変更するが、どうやら頭はいっぱいいっぱいになるらしく、その後も度々戦士に注意の声を投げられた。声に乗って届く戦士の感情は本気で心配している様子だった。目の前で一人の様子が変われば誰だって心配する。それか気になって仕方ないかのどちらかだ。

ようやく、頭が整理できてきた。俺とあほ戦士は貿易都市イレイサーの暴動を調査しに行く。必要とされる情報は暴動の規模。そして、主要人物の容疑。骨が入りそうだ。一個単体の暴動を一警備兵が調べられるのか？

「頑張ってみないと分からないんじゃないですか？」

「そうだよなあ、やらなきゃ何も始まら……ってお前っ!？」

「すいませんが、先程の電話の内容聞かせていただきました。どうやら、暴動を調査しに行くんですか？」

こいつ。戦士じゃなくて探偵にでもなった方がいいんじゃないか。軽い罪人であるこのあほ戦士が付いてくる必要はないし、ついてき

たところでメリットもないからな。ここらで興味を削ぎ落としておくことにする。思いつきり舐めた口調で俺はこう返した。

「は？ 調査なんか行かねえよ」

「何ですか？ 頼まれごとじゃないですか？」

「さっきも聞こえたかもしれないが、俺みたいな新人には都市一個単位の暴動を止める力なんか無いんだよ」

この一言には言い返す言葉が見つからないのか、まるでふてくされたような顔でこちらを戦士は見てきた。そして、機嫌を損ねたような声でこう返してきた。

「ふうん……そうですか」

どうやら興味は無くなったようだ。言っておくが俺の心の中からは諦めるなんてことは一切浮かんてないからな。本部長に対する恩義っていうものがあるのもそうだが、これは仕事なんだ。成し遂げることによって対価として金が入るもの。だからこそ頑張る。これぞ社会の中で一番濃く発生する労働に対する動きだな。金があるから労働する。その何が悪い。

その会話の後、しばらく沈黙が続く中俺とあほ戦士はイレイサーへの道を急いだ。代わり映えない森の景色。無駄に長い土の道。左右に伸びる木々の葉ども。面白くない。

「あの」

不意に聞こえたその言葉は背後からだった。突然だったので足は止めないで言葉だけを後ろへ飛ばした。

「何だよ」

「気になっていたんですけど俺の罪って正当防衛じゃないですか？」俺は足を止めた。俺が止まるのに合わせてあほ戦士も止まったようだ。そのまま、俺は戦士の方を向く。足音で掻き消されていた風の音が、木々の間を通り葉と葉を揺らす。木々だけではなく足元に生える草花が風で揺れる音がする。それほど静寂になった瞬間。

俺は口を開いた。

「ああ、正しいだろうな」

一瞬戦士の顔がこちらを睨んだ様に見えた。言葉が先だったかどうかは分からないが、目の前の戦士の目が恐ろしいモノへ変貌していたことが分かった。そして、俺の近くへ顔を近づけてくる。顔は下を向いたままだ。どうやら、両手で俺の首元を抑えるつもりだったようだが、手が届かなかったらしくそのまま胸に両手を打ち付けた。

そして、叫んだ。

「意味分かんねえよっ！ 理解できねえよっ！」

言葉からも、俺の鎧を打ち付ける両手からも想いが伝わってきた。新人とは言え戦士の内に秘められし憎悪と屈強な怒りの思いだ。だが、それを台無しにしているということを理解している俺は、そのままこう返した。

「俺が来た時には、俺の目にはイガンとその仲間たちを蹴り飛ばしているお前の姿しか映ってなかったんだよ」

下を向いていた顔がこちらを向く。どうやら形相は先ほどから変化していない。

「それだったら目撃者や証人とかを連れて行けば、無罪が証明できるんじゃないのかよっ！」

「そんなことしたって誰も出て来ねえよっ！！」

風が再び木々の間を通り抜ける音が聞こえた。

この戦士は何も知らないようだ。深呼吸をしてから俺は何かを身構えている戦士に向かってこう言った。

「お前、あの町に来てどれぐらい経つ？ 1ヶ月も経たないだろう」

新人戦士は首を縦に振った。どうりでイガンに喧嘩を売ることができると思った。よほどの馬鹿か、身の程知らずのどちらかだからな。

「イガンのこともよく知らないのに喧嘩を買ったんだな。あのイガンと言うやつは、ここら辺一帯を縄張りとする山賊だ。ターゲットも幅広い。金持ちから貧乏人まで等しく物を奪う山賊だ。……お前のときは油断していたのだろうが、けっこう腕も立つ。つまり、あ

の町ではある種の有名人として扱われてるんだ。ここまで言えば、もう大体分かるだろう」

身構えていた戦士が恐る恐る口を開いた。

「皆怖くてイガンを敵に回さないってことですか？」

俺は首を縦に振った後、言葉をつづけた。

「そういうことだ。お前みたいな新人戦士の見方をする利益もない。イガンを敵に回す利益もない。損得勘定抜きにしても自分の身に危険が回る行為何て、あの町の一般人はやらねえよ。だから、お前はここにいるんだよ。恨むのなら、俺を恨むなよ。この社会を恨め」

「先進むぞ」と言って俺は戦士に声をかけた。

しばらく後ろを振り向かなかったが、背後から地面を踏む足音が聞こえたのでどうやらついてきているようだった。何だかんだ言ったがついて来てもらわなくては困る。すっかり忘れていたが、このあほ戦士は俺のノルマなのだ。俺の給料なのだ。

「白い壁……」

「おう、あれが貿易都市イレイサーの外壁だ。ということはそろそろ壁門だな」

緑色に覆われた視界に突如として現れた白い壁。ウン百メートルはある壁である。周囲の外見に全く溶け込まないのは貿易都市だからである。どういふことかって？ 自己中が多くいるってことだ。

「知ってるし。俺もここを通ってきたんです」

「……生意気だな、本当」

俺が白壁に近づこうとした瞬間に石が前から飛んできた。前から？ 前は壁しかないはず。そして、盛り上がる目の前の地面。現れたその姿は……。

「えええ！？」

「こ、こいつあ」

どうやら暴動を指揮する奴がこいつを買ったのか、それとも対策を練った奴らがこれを買ったのか。とにかくどこから買ったのかは

明確な代物でございます。というわけで、こういふときだけは恨ま
せていただきます。

魔法使いの野郎っ!!

「こんにちはあー!」

「しかも、しゃべったああ!？」

「めんどうだな、さっさと片付けて街に入るぞ」

こんなもの取り扱うなよ、本当に。喋ることができるゴーレムと
か番犬にいらなから。

第四話 親しきゴーレムにも礼儀有り（前書き）

どうも。夢幻です。

戦士君の技が今回初公開ッ！ 読みは好きに読んでください。

今回も感想お待ちしております。一切の読み直しをしておりませんので、誤字脱字等もあるかもしれないと思いますが、その辺の意見も受け付けておりますのでよろしくお願いします。

では、相変わらず読みにくい文章ですがどうぞ。

9月22日…絶妙な部分を修正。おそらく誰も気づかないはず。

9月25日…微妙な部分を修正。もう勘弁して。

第四話 親しきゴーレムにも礼儀有り

「どうも。ここの守りを任せられているゴーレムです。以後お見知りおきを」

目の前の地面が盛り上がり、それらが巨大な塊になったかと思いきや人形のように形を形成し始めた。まるで大きな岩のように丸く形を作り出した両手を縦横無尽に振り回しながら彼は言う。お面のように平らなその顔に掘られた口がぱくぱくと開きながら言葉を発している。首と言う部位は存在しておらず、そのまま胴体が地面に刺さっている容姿である。

鎧姿の男は先ほどさっさと片付けると言ったが、新人の戦士と並みの警備兵がさっさと片付けられるのだろうか。

「そういう心配じゃなくて、自分の身の心配をしろ。俺だってゴーレムと戦闘したのなんか……5年ぐらい前だからな」

「戦ったことあるんですかっ!？」

「経験したことがあるだけだ。有効な戦闘方法なんかはもう忘れちゃった。ほら、構えろ!」

鎧姿の男はそう叫びながら腰に身に着けていた鞘から剣を取り出す。右手に構えたその姿勢はなぜだか警備兵らしい戦闘スタイルとは異なるように見えた。その姿勢はまるで――。

「来ないならば、こちらから排除させていただきますっ!」

考え事をしている場合ではないようだ。俺は腰に取り付けていたちょうど手で握れるぐらいの大きさの棒を、右手に持ち思いっきり前に振った。振り切る瞬間、その棒を柄とする斧へとその姿を変形させた。これが俺の武器。いつもは背中に背負っているが、動きづらい場所では小型化させている。

今はそんな悠長に武器の説明をしている場合ではない。

「あほ戦士! 武器なんかで防御しようと考えるなよ、壊されるぞ!」

「見れば分かります！」

既にゴーレムの攻撃を避けながら、何度か切りかかっている鎧姿からアドバースが飛んできた。大きな両手を交互に振り回す両腕はまるで巨大な丸太を力任せに振りまわしているように見える。見ているだけでは拉致が明かない。俺も戦わなければ。

俺が前進した際に飛んできたのは相手の左腕。すかさず、俺はしやがみこむ。間一髪で当たらずに済んだ。どうやら相手の攻撃は軌道をずらすことが可能ではないようだ。飛んでいった左腕の隙を埋めるかのように右手によるプレス攻撃が襲いかかる。狙われたのは鎧姿だったが。

「くっ……」

全力で走りながら真上から襲いかかる丸い鉄球のような手のプレスを避ける鎧姿。その間に俺は相手の胴体に力いっぱい切りかかる。両手にもすごい振動が伝わってくる。まるで岩石に向かって斧で切りかかったような感じがする。なんと、切りかかった場所を見ると、一つも傷がついていない。

「邪魔です」

そう一言ゴーレムがつぶやくと左側から先程振り切った左腕がこちらに向かって戻ってきていた。俺はすかさずその場を後ろへ低姿勢で飛び逃げた。まるでビーチフラッグに飛びかかるように。

そして、愚痴をこぼした。

「新人戦士にゴーレム退治とか難易度高すぎるんですよっ！」

「退治しようなんて考えるな、あほ戦士」

無様な逃げを見せた鎧姿が俺に近づいてそう言った。「逃げるぞ」と言いながら鎧姿は俺についてくるように合図した。

森の中に姿を隠した俺と鎧姿。幸いゴーレムは俺達を追ってくることは不可能なようだ。そして、鎧姿は俺に一つの提案をしてきた。「もう一度言うが今の戦力ではゴーレムを退治することは不可能だ。そこであいつの攻撃を封じることにする。いいか、あいつは魔法を使わない物理攻撃型のゴーレムだ。だったら腕を封じてやればいい」

「あのものすごいスピードでぶん回してくる腕を!?　　いったいどうやって」

「簡単だ。それは――」

目の前には暴れまわるゴーレムが一体。自分自身は移動することができないため見つけた侵入者を完全に排除するために、周囲の障害物を排除しようとしているのだろう。木々は無残に倒れ、地面はでこぼこな穴だらけになっていた。

斧を構え、剣を構え、俺と鎧姿は二人並んで歩く。その姿をゴーレムは捉えたのか暴れまわることを止めて俺たちの方へと姿勢を向けた。研ぎ澄まされた番人としての意志がこちらへと向けられる。新人の戦士だろうと一般人であろうと感じられるその鋭い思いは、確実に俺たちを狙っていることがうかがえる。

そして、俺たちは到達した。ここが相手の攻撃が届く位置。相手も丸腰でこちらへやってきていているわけではないということに気づいたようで無駄に暴れまわることを止めたようだった。立ち止る俺たちを見つめるゴーレムの目。

「食らいなさい」

ゴーレムの言葉が早かったか、左腕が振られるのが早かったかは分からない。だが、鎧姿と共に極限の反応速度でそれをしゃがんで避けたことには変わりない。さきほどと変わらず俺たちの頭の上をすれすれで飛んでいくゴーレムの手。鎧姿から聞いた話によるとこのタイプのゴーレムの腕の長さは変形することが不可能なのだという。プレス攻撃を避けた際に思い出したらしい。ゴーレムの中でも低価格で低ランクで量産可能な部類に入るらしい。よく分からないが、そうらしい。

それは置いといて、避けた左腕に注目している俺と鎧姿。その時は来た。

「今だ」

相手の腕が振り切る前から走り出した俺と鎧姿。ゴーレムはその

様子を見て、すかさず空いている右手で攻撃を開始する。先程と同じくプレス攻撃だ。

「避ける、あほ戦士」

大分先を走っている鎧姿からの忠告。正直しんどいが、逃げてばかりでは終わらないのが現実である。上空から一心不乱に急降下してくる右手。感覚を研ぎ澄ませてなんとか見切る俺。数十センチ横のところに落ちたことには内心ドキドキしているが、今はそれを落ち着かせている場合ではない。

狙うべく目標はただ一つ。振り切ろうとするあの左腕だけだ。

「あほ戦士っ！　そこまで熟練度高いって言うなら、とっておきの技でも見せてやれ！」

どうやら鎧姿はもう攻撃を終わらせたようだ。よく見ると左腕のある部分に無数のひびが入っているのが分かる。

「リクエストに、お応え、して見せましょう」

バクバクの心臓を堪えながら鎧姿の注文に返事をする自分。

俺は走りながら斧を水平に持ち、右側に構える。息を吐きながら走る速度をどんどんあげていく。目標まであと少しとなったところで、俺は足に力を込めて思いつきり地面を蹴り飛ばす。

「食らえ、この一撃！　爆碎天撃イツ！」

空中へと移動した俺はそのまま斧を頭上に構え、目標めがけて思いつきり振り下ろした。ものすごい衝撃と共に強烈な一撃がゴーレムの左腕に命中する。

すると、ゴーレムの左肩が――壊れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3095u/>

勇者さんとその他もろもろ復帰物語

2011年9月26日03時22分発行